

分野 (3) 気管支ぜん息の動向等に関する調査研究

研究課題名 : 気管支ぜん息患者の長期経過及び変動要因

申請課題名 : 気管支ぜん息の動向等に関する調査研究

調査研究代表者氏名 : 谷口 正実

1. 評価軸別の評価

大変優れている(5点) 優れている(4点) 普通(3点) やや劣っている(2点) 劣っている(1点)

	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
(1) 研究成果目標(目的)の達成度	2人	3人	1人	0人	0人	4.2
(2) 研究計画の妥当性	3人	3人	0人	0人	0人	4.5
個別評価平均						4.3

2. 総合評価

(1) 評価基準に沿った評価	3人	3人	0人	0人	0人	4.5
(2) 記述評価	<p>・小児と成人の両者の調査で新しい知見が見出されているので、今後も継続して追跡していくことが望まれる。</p> <p>・継続されてきた研究であるが、更なる進展を望む。</p> <p>【小児ぜん息部門】</p> <p>・乳幼児の喘鳴反復患者のガイドラインに沿った治療による経過をフォローし検討している。その結果、9割以上が間欠型になり、真の重要度でも45%強が間欠型になったが、半数以上が長期管理薬を使用していた。この結果は抗炎症治療のためなのか自然経過によるのかは不明である。いずれにしても、2歳での喘息と診断された児は5年後には半数が間欠型になっている。米国のデータと単純に比較すれば今回のガイドラインに沿って治療された調査対象の方はやや改善度は高いと見てよいか？それとも単純に比較できないか？ただし、いずれにしても喘息と確診し、ICSを使用した例は5年間変化していないということからICSは少なくとも治癒までは持って行っていないかもしれない。5年後の段階の寛解または治癒が達成されているかの調査結果が知りたい。</p> <p>・小児喘息の長期継続研究は肺機能検査、リスク因子の解析・5年間の経過の分析など着実な成果が認められる。</p> <p>・小児の長期予後は、専門施設から登録され治療管理されている患者が対象者なので、ガイドラインに沿った治療管理が行われている(又は行われていた)場合の予後を反映していると考えられる。一般医の治療管理下にある患者では、予後が異なることが推測されるが、いかがだろうか。</p> <p>【成人ぜん息部門】</p> <p>・保険診断名による大規模データ解析の結果、BMI>30の女性での気管支喘息リスクの増大が検証されたことは欧米の成績との対比で意義がある。</p>					

・メタボ検診結果とレセプト上の喘息を利用した大規模調査である。結果では女性においてBMIが25.0-29.9、または腹囲が90cm以上のものに喘息(レセプト上の)が多かった。何らかの形でレセプト喘息とこれらに関連があり、従来の肥満を合併した喘息のデータを裏付けた。しかし、これは結果なのか原因なのか、さらになぜ男性には関与しないのか、この女性にみられるレセプト喘息の中身(重症度等)についての検討が待たれる。

・肥満者、特に若い女性の肥満者に喘息の発症率が高いという事実は今では国際的にも認知されている。その理由は必ずしも明らかになっていないが、副腎機能との関係については検討がなされているのであろうか。

・メタボリック症候群の各種因子が喘息にどのような影響を与えるかを研究することは興味あるテーマである。しかし、喘息の長期予後に関する調査も当研究班に課せられた重要な課題である。これまでエントリーした症例を見失うことのないように、丁寧にfollowすることが大切である。時間のかかる調査研究なので次の世代まで確実に調査を継続させる体制を整えておくことが望まれる。

・喘息が呼吸機能の発達に及ぼす影響を検討することは古くて新しい重要なテーマである。喘息の純粋な影響を正確に評価するためには寛解期にある患者の呼吸機能を測定する必要がある。